

いきいき 行田人

幻想的なホタルの光で
多くの人に感動を

徳重 総章さん（73歳・天満）
ふさあき

行田でホタルが舞う姿を、たくさんの人に見てもうらおうと活動している古代蓮の里ホタルの会。この会の会長を務めるのが徳重総章さんです。

徳重さんは皆野町で生まれ、自宅近くには沢が流れるなど自然環境に恵まれた場所です。育ちました。「子どものころ、夏になるとホタルを追いかけて回し、夜には家の中にまで飛んで来たものです」と話すように、徳重さんにとってホタルは身近に「ごく当たり前の存在」でした。大学進学で故郷を離れ、教員となつて昭和37年に転勤で行田へ越してきた徳重さんは、退職後の平成15年4月、さいたま市で活動している見沼ホタル保存会の新聞記事を目にしました。「さいたま市でホタルが見られるなら、行田でも見られるようになるのでは」故郷で見ていたホタルの飛び交う光景がよみがえり、刺激を受けたそうです。



早速、繁殖場所の選定や図書館での資料探しに取り掛かり、見沼ホタルの会や同様の活動をしている団体を視察したり、10年以上ホタルの研究をしている小学校へ赴き勉強のためにと300匹もの幼虫を分けてもらったりと、多くの人や団体などと交友関係を築きながらホタルについての知識を広げました。そして、平成16年9月に古代蓮の里ホタルの会を発足させ、ホタルが定着し繁殖しやすい環境づくりに向け、大きな第一歩を踏み出した徳重さん。「ホタルの特徴や飼育の仕方、毎月開催している会合で会員に伝える情報など、日記を書くように書き留めていくんです」これまで調べたホタルに関する情報がびっしりと書かれた何冊ものノートには、ホタルに思い焦がれる徳重さんの気持ちがこもっています。

5千〜7千匹の幼虫を飼育しても成虫になるのは2割にも満たず、現代の自然環境の中でホタルを繁殖させることは難しいとのこと。だからこそ「夏の夜に幻想的な光を放つホタルの姿を見ることができたときは、わが子の成長を見るようなうれしさがあります」と話す徳重さんは、一人でも多くの人に自然への興味と関心を持ってもらい、ホタルが舞う姿で感動を与えようと意気込みを新たにし、6月18日から3日間行われるホタル観賞会でも案内役として、闇夜を乱舞するホタルの魅力を存分に語ります。

私の作品

俳句

天場 安田 幸江
懐へ春風入れてペタル踏む

緑町 鈴木喜久女
燕飛ぶ水の勢いも野川かな

持田 長田 義子
幾千里まだ来ぬ燕この古巣

荒木 島田 香子
雪柳黄昏時の風に浮き

須加 原 ちか子
大空へ競って背伸び土筆かな

須加 長島八重子
朗報を祈りて仰ぐ春の月

門井町 小暮 愛子
ほどほどに芥子きかせて菜花和え

門井町 宮田 淑尚
クレーンが空かきまわし山わらう

荒木 島田 鈴代
ふきのとう我が人生の味に似し

佐間 須永 節子
芽吹き時嬉しき事も憂き事も

白川戸 西田 豊子
此の店は今年百年新茶買つ

荒木 藤田 栄之
利根越える蝶もありけり渡し守

城西 榊原しずか
寄り掛かるだけの鉄棒花吹雪

前谷 石井マサ子
ふたたびのいのち賜りさくら咲く

犬塚 細井喜美江
鯉のぼり宇宙に飛べる時代かな

（木島 斗川 監修）



『お花見』（手芸）
岡本 昭江（谷郷）

◎皆さんの作品を募集しています。
◎俳句は毎月5日までにはがき・封書で広報広聴課へご応募ください。